

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月11日現在

機関番号：82105

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22380089

研究課題名（和文）限界集落における持続可能な森林管理のあり方についての研究

研究課題名（英文）A study on sustainable forest management in the village which population decreases intensely

研究代表者

奥田 裕規（OKUDA HIRONORI）

独立行政法人森林総合研究所・関西支所・地域研究監

研究者番号：00353631

研究成果の概要（和文）：脆弱化した社会組織を活性化させるためには、地域社会に新しいアイデンティティを形成する社会変化を促す必要がある。このような社会変化を促すためには、「内発的発展」が重要な役割を果たす。「内発的発展」は、地域住民を結ぶネットワーク上に存在し、ネットワークは、地域住民共通の「大切なもの」を守ろうとする「思い（紐帯）」で結ばれている。そして、地域の「大切なもの」を守ろうとする「思い」が強ければ強いほど、そのための取組が活発化し、「地域資源（コモンズ）」に対する要求が高まる。

研究成果の概要（英文）：To revitalize local societies, it is necessary to promote the society change which forms new identities in these societies. And "endogenous development" plays an important role to promote this society change. "Endogenous development" exists on a network of local inhabitants, and this network is tied up in "thought(bonds)" that is going to protect a local inhabitants common "important thing". The stronger such "thought" to protect an "important thing" becomes, the more vibrant will be the activities to protect an "important thing". And the more vibrant such activities to protect an "important thing" becomes, the more "local resources(the commons)" will be required.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2011年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2012年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野：農学

科研費の分科・細目：森林学、森林科学

キーワード：コモンズ・内発的発展・山村・限界集落化

1. 研究開始当初の背景

限界集落化の著しい山村では、地域住民による、普段の営みのなかでの適切な地域資源管理が難しくなっている。このような

山村で適正な地域資源管理が行われていくためには、地域内外の住民や組織がお互いに協働して、ネットワークを紡ぎながら、地域資源を管理していく必要がある。本研究は、

そのネットワークを繋ぐものは何か、ネットワークを紡いでいく道筋とはどのようなものかについて、コモンズ論や協治論を活用しながら、明らかにしていくこととする。

2. 研究の目的

限界集落化しつつある周辺地域では、所有者の不在村化や高齢化により、これまで住民の普段の営みのなかで適正に管理・利用されてきた地域資源の管理・利用が放棄されつつある。一方で、これらの地域資源の管理・利用に、地域内外の様々な人や組織が、様々な形で、協働して係わるという取り組みも始まっている。これらの周辺地域で、地域資源を適正に管理・利用していくためには、地域住民や組織と地域外の住民や組織が、お互いにネットワークを紡ぎながら、地域資源を管理・利用していく必要がある。そのために必要な条件整備のあり方について、明らかにする。

3. 研究の方法

限界集落化しつつある周辺地域の地域資源管理・利用上の問題点を明らかにするために、地域を取り巻く、地理的、社会的状況の異なる4地域における地域資源管理・利用の実態を調査し、それらに係わる人や組織の繋がりを見極め、それらの係わりの形と強弱を把握する。そして、地域外から地域資源管理に民間企業、NGO、学者など、多様な主体（アクター）が関わってくることのメリットとデメリットを評価する。その結果をふまえ、地域内外の住民や組織が、ネットワークを紡ぎながら、地域資源を適正に管理・利用していくための条件整備のあり方について、人と人、人と組織のネットワークの重要性を取りあげるコモンズ論や協治論等を用いて、明らかにする。

4. 研究成果

(1) 調査地の概要

① 岩手県沢内村

沢内村は「生命尊重」を基本原則に、全国に先駆けて65歳以上の老人医療無料化を行うなど、保健医療・福祉に重点をおいた施策を行ってきた。1961年に全国に先駆けて、60歳以上の老人及び1歳未満の乳児の医療費10割給付を実現し、また、福祉の面では、1885年福祉共同作業所を開設し、障害者の就労対策に努めてきた。沢内村では「生命に暖かい雪国」を目指した地域性豊かな行政が行われ、医療・福祉の村として全国的に知られている。

② 岩手県遠野市附馬牛町

遠野市は、民俗学者である柳田国男の「遠野物語」で知られ、岩手県南部、北上山地中最大の広がりを持つ遠野盆地に拓けた、遠野南部氏の城下町として古くから栄えた町であり、盛岡市と沿岸部を結ぶ交通の要所に位置する。

③ 山形県金山町

1878年、金山町に立ち寄った英国地理学会特別会員イザベラ・バードは、金山町を「非常に美しい風変わりな盆地、山頂までピラミッド形の杉の林で覆われ、北方へ向かう通行をすべて阻止しているように見えるピラミッド形の丘陵の麓にある町、ロマンティックな雰囲気の場所」と紹介している。

(2) 考察

① 沢内村の暮らしを支えるネットワーク

沢内村では、「お年よりの暮らし」を守るために、お年寄りの住む家の除雪サービスを行う「スノーバスターズ」のようなボランティアグループが活発に活動している。そして、沢内村の「スノーバスターズ」に刺激されて、近隣市町村で同様の「スノーバスターズ」が生まれ、彼らが当地を訪れるようになってきている。また、ハンディキャップを抱える人たちの集まる福祉共同作業所の目玉事業として1985年の開所当初から実施されている「ふるさと宅急便」は、地域で採取・加工された特産品を年4回、地域外に住む「ふるさと会員（「ふるさと宅急便」の契約者）」に送ろうというものである。送られる特産品は福祉共同作業所が直接生産・加工したもののほか、「生活改善グループ」や「老人クラブ」などが採取・加工した山菜や手作りの工芸品である。これは、行政が住民福祉の向上を目指した地域性豊かな取組を行い、それを着実に継続・発展させていくための、地縁によるネットワークをベースにした様々な取組が活発になされ、そのネットワークが、村外・都市部へと広範囲に広がっている。このような地域内外に様々な形で張り巡らされたネットワークが強ければ強いほど、また、その広がりが広ければ広いほど、これらの取組は活発化する。結果として、地域内外の住民を繋ぐネットワークが、「お年寄りや身体にハンディキャップを抱える人たちの暮らし」を支えるための活動を活性化させるという社会変化をもたらし、地域社会の「内発的発展」を導く。そのような地域内外の住民を繋ぐものは、「地域の暮らし（コモンズ）を守りたい」という、地域内外の住民共通の「強い思い」である。彼らが支えようとしている「地域の暮らし」は、地域住民が地域で暮らしていくうえで、「必要度の高いコモンズ」とい

える。

②岩手県遠野市附馬牛町の椎茸生産を支えるネットワーク

附馬牛町住民は、収入確保のために椎茸の産地化に努力し、そして、ホダ木確保のために椎茸分収造林組合を組織し、コナラ林を国有林内に整備する「国有林を共同で利用しながら暮らすためのシステムづくり」に取り組んできた。この結果、附馬牛町では地域の重要な産業である椎茸生産に必要なホダ木の確保のための、地域住民を繋ぐネットワークが、国有林内での「コナラ林」整備を着実に進展させるという社会変化をもたらし、地域社会に「内発的発展」を導いている。地域住民をネットワークで繋いでいるのは、地域で暮らしていきたいという、住民共通の「強い思い」である。「コナラ林」は、地域で暮らしていくために必要不可欠な、なければ生活に困る、地域住民にとって「必要度の高いコモンズ」となっている。この取組は、過去「コモンズ（ローカルコモンズ）」として利用され、今は遠い存在になっている入会林野を、椎茸生産に必要なホダ木を供給する場として、再度、地域で利用しようとする「コモンズ再生」の取組といえることができる。

③岩手県遠野市附馬牛町の森林保全活動を支えるネットワーク

遠野市附馬牛町の大出・大野平地区住民は、国有林の協力や指導を受けながら、「早池峰普通共用林組合」を設立し、地域外の入林者から徴収した山菜・キノコ採取料を資金として、マナー向上を周知する看板の設置、刈り払い等林道の整備、ゴミ拾い、森の市、パトロールを行うなど国有林内に設定された「共用林」の環境を保全する取組を活性化させている。このように遠野市附馬牛町では、地域住民のネットワークが、「共用林」の環境保全の取組を実現させるという社会変化をもたらし、地域社会の「内発的発展」を導いている。このネットワークを繋いでいるものは、地域の大切な生活環境としての「共用林」をゴミ捨てや山菜の乱獲から守り、附馬牛町の大きな魅力である「きれいな環境」のなかで暮らしたいという、地域住民共通の「思い」である。しかし、最近では、住民の参加も振るわず、採取料収入も減少傾向にあることから、「共用林」は、別段それが荒廃しても、直ちには地域で暮らしていくことに支障は生じない、地域住民が、地域で暮らしていくうえで「必要度の高くないコモンズ」といえる。この取組を再び活性化させるためには、地域住民をその気にさせる、更なる動機付けが必要となる。

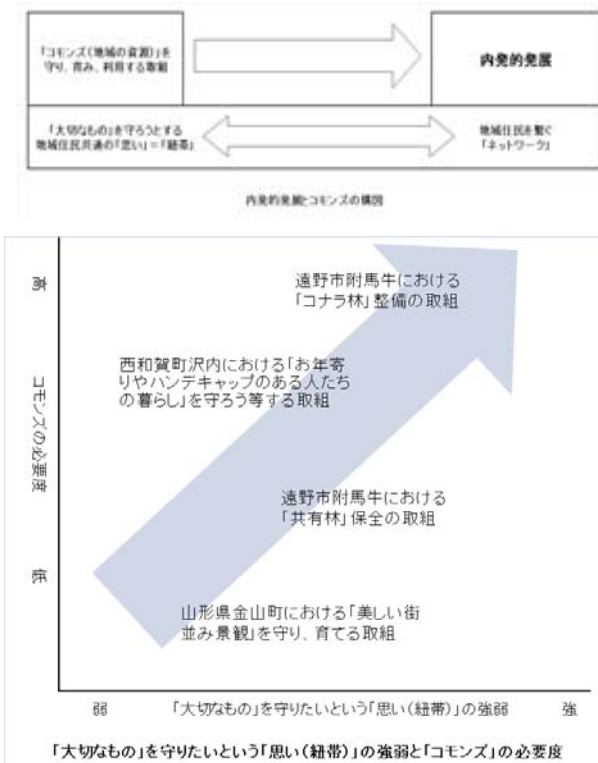
④山形県金山町の街並み景観づくりを支えるネットワーク

金山町は、1986年に「金山町街並み景観条例」を制定し、「金山型住宅」の普及を促す助成制度を設けている。町民の多くは、町の美しい街並み景観のなかで暮らしたいと思ひ、町の景観・環境と調和した住宅、「金山型住宅」を建てたいと願っている。町民は家を建てるための相談に金山大工や設計事務所を訪ね、そこで「金山型住宅」を勧められ、それを建てることを決心する。建築を請け負った金山大工は、金山の製材所に一棟分の製材品を注文し、注文を受けた製材所は地域の森林所有者から購入した金山杉から必要な製材品を生産する。森林所有者は製材所から金山杉材の安定的な供給を求められ、それに応えるため、強度があり、加工のし易い80年生以上の大径木生産のための森林経営を行っている。このように、金山町では、町の歴史、景観、資源状況のなかで、美しい街並み景観づくりと住宅建築が結びつき、町民の美しい街並み景観のなかで暮らしたいという「思い」が、金山大工に金山杉製材品を使った「金山型住宅」を建てさせている。金山町には、金山町にふさわしい、美しい街並み景観づくりのための、町民、金山大工、設計事務所、製材所、森林組合、森林所有者、町役場を結ぶ「金山町美しい街並み景観づくりネットワーク」が形成されている。そして、このネットワークが、地域住民に「金山型住宅」を選択させるという社会変化をもたらし、地域社会の「内発的発展」を導いている。このネットワークを繋いでいるものは、「美しい街並み景観のなかで暮らしたい」という、地域住民共通の「思い」である。最近、「金山型住宅」という外見が似たような家に住むことに抵抗感を持つ住民が、若い人たちを中心に、町の景観にそぐわない家を建て始めている。このように、「美しい街並み景観」は、なくなっても地域で暮らしていくことに影響のない、地域住民にとって「必要度の高くないコモンズ」といえる。この取組が、今後も、継続していくか否かは、ネットワークで結ばれた地域住民が、「美しい街並み景観のなかで暮らしたい」という「思い」を持ち続けることができるか否かにかかっている。

5. まとめ

これまで取り上げた4つの事例に基づき考えれば、「内発的発展」は、地域住民共通の、「大切なもの」を守ろうとする「思い（紐帯）」で結ばれたネットワークの上に存在している。このように、地域の「内発的発展」の土台は、「大切なもの」を守ろうとする「思

い」であり、それが強ければ強いほど、「大切なもの」を守るための取組は活発化し、地域社会は「内発的発展」に導かれる。そして、大切なものを守るための取組が活発化すればするほど、その取組のなかで守り、育み、利用されるべき「資源・サービス(コモンズ)」の必要度は高まる。このことから、「コモンズ」の必要度は、「大切なもの」を守ろうとする「思い」の強弱により決定されるものと考えられた。



6. 今後の課題

「コモンズ」の必要度は、その時々で変化していくものである。例えば里山は、江戸時代、肥料、牛馬の飼料、また家やの材料や燃料の採取源として、地域に暮らす人たちにとって不可欠な存在であったが、燃料革命により灯油などの石油製品にとってかわられ、薪炭が使われなくなったり、有機肥料が化学肥料に置き換わったりするなどし、木材供給のための人工林になり、地域の人たちにとって遠い存在になっていった。このような「コモンズ」の必要度の時間的な変化を分析すること及び「必要度」の低下した「コモンズ」に新しい価値を見出す過程や道筋の解明は今後の重要な課題である。

7. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 25 件)

- ①奥田裕規、井上真、日本の山村の内発的発

展とコモンズ、森林応用研究、査読有、2013/1 受理

- ②Mangala Premakumara De Zoysa, Makoto Inoue, Utako Yamashita and Hironori Okuda, Collective Forest Management System in Japan: A Case Study in Osawa Property Ward Forest, Journal of Forest Science, 査読有、Feb;29(1)、p58-70、2012
- ③藤井基弘、深町加津枝、森本幸裕、奥敬一、伝統行事「京都五山送り火」の形態と祭祀組織に関する研究、ランドスケープ研究、査読有、75(5)、p587-592、2012
- ④奥田裕規、山村の内発的発展のための条件：コモンズ論と協治論からの考察、学位論文(東京大学大学院農学生命科学研究科)、査読有、186pp、2012
- ⑤齋藤暖生、三俣学、温泉資源の持続的利用と管理制度に関する一考察—長野県上田市別所温泉財産区の事例に基づいて—、温泉地域研究、査読有、第 16 巻、p1-12、2011
- ⑥八巻一成、庄子康、林雅秀、自然資源管理のガバナンス—レブニアツモリソウ保全を事例に、林業経済研究、査読有、57(3)、p2-11、2011
- ⑦阿部佑平、柴田昌三、奥敬一、深町加津枝、京都市におけるササの葉の生産および流通、日本森林学会誌、査読有、第 93 巻、p270-276、2011
- ⑧大久保実香、田中求、井上真、祭りを通して見た他出者と出身村とのかかわりの変容：山梨県早川町茂倉集落の場合、村落社会研究ジャーナル、査読有、p6-17、2011
- ⑨奥田裕規、井上真、駒木貴彰、"The Commons" Play an Important Role in the "Endogenous Development" of a Mountain Village: A Local Production for Local Consumption and a Beautiful Townscape in Kaneyama-town, Yamagata Prefecture, Japan Agricultural Research Quarterly (JARQ)、査読有、44(3)、p311-318、2010
- ⑩井上真、新たなコモンズ(協治)の創造：政策立案者への提案、季刊・環境研究、査読無、第 157 巻、p99-107、2010
- ⑪垂水亜紀、山村居住の現状と今後、四国の森を知る、査読無、No. 14、p4-5、2010
- ⑫三俣学、コモンズ論の射程拡大の意義と課題、法社会学、査読有、第 73 号、p148-167、2010

〔学会発表〕(計 30 件)

- ①大久保実香、若者にとっての山村—山梨県早川町の事例から、日本村落研究学会第 60 回智頭大会、2012/10/27、鳥取県八頭郡智頭町

- ②Tanaka Nobuhiko, Okuda Hironori, Can Green Tourism Create New Destinations in Satoyama Rural Areas?—A Case Study of a Geographical Analysis in Mogami Area, Yamagata Prefecture, Japan, World Leisure Congress 2012, 2012/9/22、イタリア共和国リミニ県
- ③三俣学、「公」・「共」・「私」相互補完の環境資源政策の試論；コモنزに及ぼす外部インパクトの分析を通じて、環境経済・政策学会 2012 年大会、2012/9/16、東北大学（仙台市）
- ④奥田裕規、横田康裕、井上真、斎藤暖生、狩谷健一、山村の変貌と入会林野利用についての考察、第 45 回環境社会学会大会、2012/6/3、秋田県大潟村
- ⑤八巻一成 他 9 名、山村の持続的発展と人的ネットワーク：岩手県葛巻町の事例、第 45 回環境社会学会大会、2012/6/3、秋田県大潟村
- ⑥三俣学、The Study on the Analysis of Response to the Impacts by Local commons, International Workshop on the Study of Commons (Discussant ; M. McKean, S. Buck and O. Gabriela), 2011/11/21、東京大学（東京都）
- ⑦奥敬一、民家と里山、日本建築学会大会（関東）、2011/8/24、早稲田大学（東京都）
- ⑧深町加津枝、奥敬一、三好岩生、田淵敦士、Experimental study for conservation of satoyama landscape through repairing old timber houses on the Tango Peninsula, Kyoto (1) New trend of the conservation activities of traditional houses, Wood Culture and Science Kyoto, 2011/8/7、京都大学宇治おうばくプラザ（宇治市）
- ⑨寺内大左、井上真、タイト化するコモنزの意義と課題、第 44 回環境社会学会大会、2011/6/4、関東学院大学（横浜市）
- ⑩大久保実香、過疎地域における伝統行事の担い手としての他出者、民俗芸能学会第 133 回研究例会、2011/3/26、早稲田大学（東京都）
- ⑪SAITO Haruo, Administrative centralization threatens commons-owning municipal sub-unit: Property Wards (Zaisanku) in Toyota City, Japan, 13th Biennial Conference of the International Association for the Study of the Commons, 2011/1/14, Hyderabad (India)
- ⑫Makoto Inoue, Prototype design guidelines for ‘collaborative governance’ of natural resource, 13th Biennial Conference of the International Association for the Study of the Commons, 2011/1/12, Hyderabad (India)
- ⑬大久保実香、過疎地域における伝統行事の担い手としての他出者、民俗芸能学会第 133 回研究例会、2011/1/12、早稲田大学（東京都）
- ⑭田中求、成員内正当性と外部者関与正当性の接合と相克：ソロモン諸島ガトカエ島における資源保全区の設定過程から、第 43 回環境社会学会大会、2010/12/5、法政大学（千代田区）
- ⑮Makoto INOUE, Key note speech : A way to make use of local reality in a global context, International Symposium 2010 “Sustainable Agriculture for Prosperity”, 2010/11/16, University of Ruhuna. (Sri Lanka)
- ⑯Kazushige Yamaki, Yasushi Shoji, Masahide Hayashi, Social network structure in Rebun Lady-slipper (Cypripedium macranthos var. rebunense) conservation, XXIII IUFRO World Congress, 2010/8/24, COEX Center (Seoul. Korea)
- 〔図書〕（計 21 件）
- ①井上真、朝日新聞社、森林環境 2013（復旧・復興や地域資源は誰のため）、p4-6、2013
- ②三俣学、朝日新聞社、森林環境 2013（多様に広がるコモنزの世界）、p20-28、2013
- ③斎藤暖生、朝日新聞社、森林環境 2013（入会から世界を変える）、p29-39、2013
- ④大久保実香、朝日新聞社、森林環境 2013（限界集落とローカル・コモنز）、p53-64、2013
- ⑤井上真、中央経済社、自然資源経済論入門 <2> 農林水産業の再生を考える（自然資源ガバナンス論へのアプローチ：森林コモنزから考える）、p235-254、2011
- ⑥奥田裕規、日本林業調査会、山・里の恵みと山村振興（山村振興問題の課題）、p47-54、2011
- ⑦奥敬一、深町加津枝、日本林業調査会、山・里の恵みと山村振興（多様な主体が関わる地域資源管理の取組）、p243-275、2011
- ⑧垂水亜紀、日本林業調査会、山・里の恵みと山村振興（グリーン・ツーリズムを支える地域構造）、p291-303、2011
- ⑨土屋俊幸、日本林業調査会、山・里の恵みと山村振興（サステイナブル・ツーリズムの可能性—金山町の二つの「ツーリズム」の比較から）、p329-357、2011
- ⑩奥敬一、奥田裕規、日本林業調査会、山・里の恵みと山村振興（多様な主体の連携に

- よる地域資源管理と資源論)、p47-54、2011
- ⑪田中求、日本自然保護協会、くらしと然のつながり再発見！(自然を介して人々がつながりを取り戻す)、p28-29、2010
 - ⑫菅豊、三俣学、井上真、ミネルヴァ書房、ローカル・コモنزの可能性(グローバル時代のなかのローカル・コモنز論)、p1-9、2010
 - ⑬齋藤暖生、三俣学、ミネルヴァ書房、ローカル・コモنزの可能性(地方行政の広域化と財産区—愛知県稲武地区の事例—)、p13-37、2010
 - ⑭嶋田大作、齋藤暖生、三俣学、ミネルヴァ書房、ローカル・コモنزの可能性(万人権による自然資源利用—ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの事例を基に—)、p64-86、2010
 - ⑮三俣学、菅豊、井上真、ミネルヴァ書房、ローカル・コモنزの可能性(践指針としてのコモنز論：協治と抵抗の補完戦略)、p197-217、2010
 - ⑯井上真、ミネルヴァ書房、ローカル・コモنزの可能性(「協治」論の新展開：あとがきに代えて)、p263-265、2010

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥田 裕規 (OKUDA HIRONORI)
森林総合研究所・関西支所・地域研究監
研究者番号：00353631

(2) 研究分担者

井上 真 (INOUE MAKOTO)
東京大学・農学生命科学研究科・教授
研究者番号：10232555

齋藤 暖生 (SAITO HARUO)
東京大学・農学生命科学研究科・助教
研究者番号：10450214

土屋 俊幸 (TUCHIYA YOSIYUKI)
東京農工大学・(連合) 農学研究科(研究院)・教授
研究者番号：50271846

藤掛 一郎 (HUJIKAKE ITIRO)
宮崎大学・農学部・教授
研究者番号：90243071

三俣 学 (MITUMATSA GAKU)
兵庫県立大学・経済学部・准教授
研究者番号：10382251

八巻 一成 (YAMAKI KAZUSHIGE)
森林総合研究所・北海道支所・グループ長

研究者番号：80353895

奥 敬一 (OKU HIROKAZU)
森林総合研究所・関西支所・主任研究員
研究者番号：60353629

垂水 亜紀 (TARUMI AKI)
森林総合研究所・四国支所・主任研究員
研究者番号：40414487

(3) 連携研究者

深町 加津枝 (FUKAMACHI KATSUE)
京都大学・農学部・准教授
研究者番号：20353831

田中 求 (TANAKA MOTOMU)
東京大学・農学生命科学研究科・助教
研究者番号：40507852

大地 俊介 (OOCHI SHUNSUKE)
宮崎大学・農学部・助教
研究者番号：90515701

大久保 実香 (OOKUBO MIKA)
滋賀県立琵琶湖博物館、研究部、研究員
研究者番号：50636074

横田 康裕 (YOKOTA YASUHIRO)
森林総合研究所・九州支所・主任研究員
研究者番号：40353908